

連載③ 地域密着を進める
女子大学の人づくり
 宮城学院女子大学学長 平川 新

1872（明治5）年に公布された学制では、華族・士族から一般庶民に至るまで、男女ともに「不学」の者がないように小学校に通わせることが布達された。だが、翌年の就学率は男子が約40%、女子が約15%、93（同26）年は男子70%、女子30%であり、依然として格差は大きい。女子の就学率が95%を超え

て男子に近くなるのは、1910年代（大正年間）のことである。
 また1879（明治12）年の教育令によって小学校以上は男女別学とされ、男子は中学、女子は女学校に別れた。しかし公立の女学校は少なく、男子中心の整備が進められていった。1900（同33）年には東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）が開設され、アメリカ帰りの津田梅子が女子英学塾（現津田塾大学）を開いた。翌年には日本女子大学校が開学している。だが、いずれも専門学校としての位置付けであった。これらが大学になるのは、戦後の学制改革が行われた48（昭和23）年のことである。
 こうしたなかでキリスト教宣教師たちが女子教育に果たした役割は、極めて大きい。フェリス女学院は1870（明治3）年、同志社女学校は76年、立教女学校は77年といったように、いわゆるミッション系の女子校が全国各地に開学されていった。江戸時代の禁教令が解除されて、キリスト教各派の宣教師たちが布教とキリスト教主義的教育の普及のために多数来日したからである。

宮城学院の前身である宮城女学校は、1886（明治19）年に創設された。創設者はキリスト教の伝道者である押川方義であり、初代校長にはアメリカから派遣された宣教師のエリザベス・プールボーが就任した。押川は同年に東北学院も創設した。
 当初は校舎ができていなかったため、授業は東二番丁の個人の屋敷で始めた。教員は外国人教師が2人、生徒は10人。数年後には50人に達

し、その後も学生は増え続けた。開校当初の回顧談によると、十代始めから二十代半ばまでの生徒が一緒に教わっていたことや、華美な服装の県知事令嬢や高官令嬢がいたこと、良家の母子が通っていたことなどが語られている。
 当初の授業はすべて英語で行われたが、指導が厳しかったのですぐに上達したという。音楽も賛美歌とオルガンの指導であった。「英語と音楽の宮城」の伝統は開校当初

明治期のキリスト教女子教育の役割



宮城学院最初の校舎（明治22年竣工）。東三番丁に建てられ、西洋風のしゃれた校舎があこがれになったという

からだだったのだ。キリスト教主義の学校だから、聖書の学習はもちろん必修である。当時は新しい時代をもたらした西洋文化に対する関心も高く、ハイソサエティな家庭の子女の入学が相次いだ。
 だが、洋風一辺倒のアメリカ式教育に対する反発も生まれた。92（明治25）年

に、5人の学生がプールボー校長に国語・国文などの日本精神を学ぶ課目の充実を訴える事件が発生している。こうした自立と自己主張の精神は西洋式教育の成果であろうが、学校運営を批判したことを理由に5人は退学を命じられた。この事件に共感して自主退学したのが、相馬黒光である。黒光は上京してフェリス女学院に入り、後に夫と共にインドカリーで著名な新宿中村屋を創業した。中村屋はこの頃に活躍した作家や画家のたまり場ともなり、中村屋サロンとしても有名になった。
 黒光より少し後の入学者に、日本初の女性新聞記者となった磯村はる（旧姓小泉）がいる。はるは卒業して母校の教師となったが、結婚して上京し、子育てをしながら記者として活躍した。1986年に放映されたNHK朝の連続テレビ小説『はね駒』の主人公は、このはるがモデルである。



平川新（ひらかわ・あらた）
 昭和25年生まれ。福岡県出身。昭和55年東北大学大学院修士課程修了。東北大学東アジア研究センター長、同災害科学国際研究所長を経て、平成26年4月現職に就任。